
ドイツさんと私

タナカハナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドイツさんと私

【Nコード】

N0649Z

【作者名】

タナカハナ

【あらすじ】

見た目小学生のOL鈴木麦子が家に帰ると、そこにはなぜかゴリラのようなドイツ人。どこかすつとぼけた日本語を話すドイツ人と、文字通りの意味で振り回される麦子との恋愛とビールと何かの日々。実際の人物とはまったく関係ありません。ドイツ語は適当です。主人公編四話完結。現在ドイツ人編連載中

玄関にゴリラ

ある日、家に帰るとゴリラがいた。

しかも、うちの玄関ポーチ。仕事柄目を使いすぎたのかな、と思
って擦ってみても、そのゴリラは一向に消えない。消えないどころ
か、すごい存在感を発している。

目算で身長二メートル弱。清潔感のある白いシャツからちらりと
見える腕には、むきむきの筋肉。

ん？ 白いシャツ？

どうしてゴリラがシャツなんか着ちゃってるんだろう、と近くに
寄ってみる。すると、私のその気配に気がついたのか、それはくる
りと振り返った。

「コンバンハ！」

しゃ、しゃべったあああ！

どこぞで目にしたCMかくや、というテンションで、私は口を開
いたそれを見上げる。

ポーチに取り付けられた暖色の灯りの下、きらきらと光る金色の
髪。私を見詰める瞳は綺麗な青色。

つまり、ゴリラはゴリラではなく、ただのかい外人だったのだ。

「こ、こんばん、は？」

だがしかし、なぜこの巨大な外国人がうちの前に居座っているの
か、という疑問はまだ解消されていない。

ものすごく威圧感のあるその顔を見上げながら、とりあえず私は

当たり障りない挨拶を返す。そして、じりじりと警戒心を露わにし
ながら玄関へと歩み寄った。うお、近くで見るとさらに巨大！

「隣に、来ました。オミヤゲ？」

なんで最後に疑問型、と心の中で軽く突っ込みつつ、外人が差し
出すそれに視線を落とすと。

なんとということでしょう！

どこかの番組ナレーションのような感想が、頭の中を駆けめぐつ
た。外人が手にしているのは、あきらかにワイン。しかも、白。そ
してドイツ産。

一瞬にしてそれだけの情報を読みとった私は、自然とにやける顔
を直しつつ、差し出されたそれをうやうやしい仕草で受け取る。

「わざわざご丁寧に、ありがとうございます」

よそ行きの顔で笑ってみせると、なぜか外人はその白い頬をうつ
すらと染めた。顔とがたいに似合わず、照れ屋らしい。

にしても、でかい。近くで見れば見るほど、遠近感が狂う。

鍛え上げられた体躯はよけいなもの一切ついていない筋肉質。

それはボディビルダーのような不自然なものではなく、どちらかと
いえば軍人さんのような、持久力ありますって感じの付き方。私の
好みだ。

その上に乗っかっている顔も、いかにも外国人ですっていう彫り
の深さ。整ってはいるのだけれど、いかつさが全面に出ているため、
これ絶対子供泣くよなっていう仕上がりに。もったいないなあ。

薄い金色の髪は短く整えられ、青い瞳が少し柔らかく私を見つめ
ていた。

ん？ そういえばなんで見つめ合ってるわけ？

「あのう、ええつと……」

「オリヴァーです。オリヴァー・ロルフ・ビルケンシュトックです。ドイツから来ました」

「オリヴァー、さん？」

「オリーのフロインドウ、オリーと呼びます」

フロインドウってなんだよ、ドイツ人。

よくわからないけど、とりあえず笑つとけ、と再びよそ行き笑顔をむけると、ドイツ人も今度は満面の笑みで答える。ただし、顔は怖い。

それが、私　鈴木^{すずき}麦子と隣のドイツ人、オリヴァー・ロルフ・ビルケンシュトックとの初遭遇だった。

引越しの挨拶にいただいたワインは、さすがドイツ産。

甘くて、スパークリングで、めっちゃうまかった。あんまし誉められたことではないが、近くのスーパーで同じ銘柄の値段を見ても、そこそこいいお値段。ダンケ、ドイツ人！

両親はともにアルコールを摂取しない人たちなので、二本あったそれはすべて私の胃の中に消えた。

小さなコップ半分のビールでも酔っぱらう両親から、どうしてこんな酒豪が生まれたのかはわからないが、ただで飲む酒ほどうまいものはないね！

現金にも、そんなことでお隣さんを敬っていた私だったのだが。

「オカエリナサイ！　夕飯はおでんです」

なぜそのドイツ人がうちにいる！

会社から帰って玄関に入ったら、いきなり壁があった。というか、壁だと思ったら、件のドイツ人だった。

見慣れた玄関が、すんごく小さく見えるのは私の目の錯覚じゃないと思う。

品のいいグレイのシャツと黒いスラックスに身を包んだドイツ人は、私からの返答を待っているのか、にこにこしたまま動かない。いや狭い、狭いから。

「た、ただいま？」

「今日、ドイツのビール持ってきましたよ。コムギ、ビア好きですよ」

好きですかって訊いてよ、そこは。まあ、間違っではないけれどもさあ。ていうか、ドイツ産？ ドイツ産のビールって言ったか、今！

いやいや待て待て、落ち着け私。その前に正すべきことがひとつあつたぞ、ドイツ人。

「コムギってなに、コムギって。私は麦子！」

「ムギコはコムギ。ムツタア、オリーにコムギいいよって」

確実に五十センチは上にある理性的なゴリラ顔を睨み付けると、ドイツ人はいたずらを怒られたような表情をして、たどたどしく弁解する。

えらい低音のいい声でんなしゃべり方されると、殴りたくなくなるくらいに可愛いじゃないか。

というのはいいとして。

「つまり、お母さんがオリーに『麦子のことはコムギって呼んでいいのよ』なんて勝手なことをぬかしやがったと。そういうことでオーケー？」

「Ja！」

あの天然母がよけいなことを！

ただでさえ低身長に童顔のこの外見のせいで、不当な扱いを社会から受けているというのに。できれば、正しく「麦子さん」と呼んでいただきたい！

二十五歳の淑女らしく扱ってもらいたいんだよ、無理っぽいけどね、すでに。きょとんとしてこちらを見ているドイツ人に、私は大きくため息をつく。ここは気を取り直して！

「オリー、おでんは初めてなの？」

「初めてです。ムツタア、オリーのうち来て、入れて言いました。オリーはとても嬉しゅうございます」

なぜ最後だけそうなる。

吹き出すのをこらえ、目をキラキラさせるドイツ人を従えてダイニングへと移動。本国にいる時、知り合いの日本人と日本映画で言葉を学んだという彼は、時々面白い言葉遣いをする。あえて、訂正はしない。

部屋に入ると、母はテーブルにおでん鍋をセッティングしているところだった。冬はこれこれ、これだよねえ。

あ、そういう重要なことをさっき聞いた気がする。

「ドイツビールあるって？」

「あら、おかえりなさい。オリーちゃん、誘っちゃったあ」

「ああ、うん。今さら言われなくてもすごい存在感あるしね」

私と母のやり取りをにこにこしながら見ているドイツ人は、やっぱりいいかい。

これで「悪い子いねがあ！」って来たら、なまはげに勝てる。ぶっちぎりだ。

「コムギ、ビアはここです。オリーのダチ、送ってくれたよー」

「おっ、オリー、すっかり『ダチ』をマスターしたね」

「した！」

誉めて伸ばす。うん、成功成功。

初めて会った時にドイツ人が言っていた『フロインドウ』ってのがわからず、辞書を引いた私。それが日本語で言うところの『友達』だとわかって、斜め上に教えました。いいんだ、『ダチ』って格好いいし。

まるで忠実な大型犬種のように、できたできたと喜ぶドイツ人の腹を、よしよしと撫でてやる。できれば頭を撫でてやりたいところだけれど、悲しいことに私の手が届くのは腹あたりまでだった。屈辱！

それをくすぐったそうに受けていたドイツ人。何を思ったのかそのでっかく厚い手で、お返しとばかりに私の頭を撫で回してきた。ちよ、やめ、首が首ががくがくするから！

「あらあ、仲良し！ 素敵ねえ」

「お母さんっ、止めてっ！ 止めてよ、私死ぬから！ 頸椎けいついやられて死んでしまうから！」

「コムギ、バカかわいいですねえ」

「いやそれ嬉しくないから。全然嬉しくないかねっ！？」

なんとかその手の下から抜け出した私は、とにかくまずは着替えしてくる、と慌てて自分の部屋へと一時避難したのだった。

おでんとすき焼きとソーセージ

「いただきまーす！」

部屋着に着替えた私が食卓につくと同時に、三人手を合わせて鍋に一礼。ちなみに、部屋着がユニクロの子供用だということは、私だけの秘密だ。

さっそくビールに手を伸ばす私を、それを持ってきたドイツ人は嬉しそうに見ている。

「コムギはドイツ人の人みたいですね」

「まあ、負けなくらいにビール好きなのことは認めるよ」

日本人がドイツドイツと呼ぶ国は、本来は『ドイチュランド』と発音するらしい。

このムキムキのドイツ人が、『ドイチュ』と口にする様は、激しく可愛い。チュっってもう、ねえ？

そのドイツ人も持参した馬鹿でかいジョッキでぐびり、とビールに口をつけた。彼が言うにはこれが普通サイズとのことだが……あなどれんな、ドイツ！

にしても、うまい。

ワインに引き続き、これだって輸入食品を扱う店に行けば、けっこうな値段するぞう。しかもわざわざ本国から送ってきたって。もしかして、金持ち？

ちくわぶの熱さに、はふはふ言いながら涙目になっているドイツ人を横目で見てみると、何を思ったのか新しくビールを開けて差し出される。

そうかそうか、あんたの中では私はそういう生き物か。よし、ありがたくいただく。

「妻子ったらあ。本当に、誰に似たのかしらねえ。こんなちっちゃいのに、そんなにどこに入っていくのかしら」

「ちっさい言わないっ」

「コムギ、バカ可愛いですよ」

「フォローになってないっ」

お客様の中に、ツツコミの方はいらっしやいませんか！と叫び出したくなるような惨状に、今はここにいない父の存在を思う。が、よく考えれば気の優しい父は常識人ではあるが、天然おっとりの母にさえツツコミをいれられない人なのであった。

しかたなく、昆布を口に放り込みながら考える。ここは話題転換を要求しよう。うん、それがいい。

「ねえ、オリーは日本でなにやってる人なの？」

なぜかおでん鍋の中に入っているソーセージを箸で器用につまみながら、ドイツ人は私の問いかけにこちらを見る。ドイツ人とソーセージ。絵的には間違ってるない。

どうせ母が『ドイツソーセージ』くらいの短絡的な勢いで、普段は入れないそれをぶちこんだということだろう。味は悪くはないけどさ。

「オリーは、守る人です」

「守る人？ なにそれ、何から？」

なぜか甲斐甲斐しく手渡された三本目のビールを飲みながら、私は首を傾げる。

ていうか、おまえは私の嫁さんか。ふたまで丁寧に開けてくれるから、私は飲むだけ。それでいいのか、ドイツ人！

「タマが飛んでくる。オリーはそれから、守る人です。仲間に指示します。怒ります。蹴り返して、仲間助けます」

うええええ。なにその危険なお仕事。

そのがたいからして、どうやっても堅気のお人じゃないとは思ってたけれど、それはつまり。

「まあ、かつこいつ。SPねっ、SPなのねえっ」

「SP？ オリー、GKですよ？」

「ドイツではそう言うのかしら？ 身体をはるお仕事なのねえ」

もつと食べなさい、と何やら感激しきりの母が、ドイツ人の皿に大根やらはんぺんやらを特盛りにする。

SPかどうかはともかく、このドイツ人が何かの警備員らしいってことはわかった。

見た目はともかく、意外と細やかで優しい彼がそんな荒事を生業にしているとは、意外である。怒るところなんて、想像もつかないけれどねえ。

見慣れてくると多少可愛く感じられるその笑顔を見つめていると、何を思ったのかドイツ人、今度は袋の中からワインを取りだしてみせた。

「ヴァイスヴァイン？」

「オリーは私を正しく誤解しているよ！ いただきますっ」

文句は忘れず、しかし私は素早く立ち上がって食器棚からワイングラスを二脚取りだし、目の前に置く。

心得ているとばかりに見事な所作で手早くコルクを抜いたドイツ人が、なみなみとそれに淡い金色の液体を注ぎ、私たち二人は気分良く杯を持ち上げた。

「こういう時、ドイツではなんて言うの？」

「プロースト！」

嬉しそうにそう言う彼につられて、私も思わずにっこりと笑う。

「プロースト！」

そんなこんなで始まった、いかついドイツ人とのご近所付き合い。その私たちふたりは今、なぜか近所のスーパーで一緒に買い物なんかをしまっている。

しかも、まるで恋人のように手まで繋いでいる。な、なぜ？

隣で口笛を吹いてご機嫌なドイツ人を恐る恐る見上げると、それに気がついた彼はますますその笑顔をきらめかせた。

「こらこら、そこらの子供さんが顔を引きつらせていますよ、ドイツ産なまはげに。」

「ムッタアが、今日はスキヤキですよ。お買い物、行って来い！」

「オリー、スキヤキの歌、歌います？」

「歌わんでいい、てかスキヤキの歌ってなんぞ！」

ぶんぶんと繋いだ手を振るドイツ人に、私は文字通り振り回される。やめれ！

合わさった手のひらの大きさもそうだが、歩幅もずいぶん違うはずなのに、気がつけばドイツ人は私に合わせて歩いていてくれた。

それに気付いて、なんとなくそわそわする。この小学生的外見から、今まで学校や会社ではさんざん子供扱いはされてきた。けれど、こういう風に女の子扱いされたことはない。欧州的エスコート術なのか！？

しかし、所詮はゴリラと見た目小学生。スーパーに入ったときから、周りの目が痛い。

なんていうか、「あれは親子？」「いや、違うでしょう」「みたいな会話がね、背中から聞こえてくるわけですよ。

うう、早くお買い物すませて返ろう。

「ええつとオリー、野菜から行くよー……っておい！ 何してんの！」

渡された買い物メモを見ていた私がそう言って、静かになった隣を見てみれば、店内で目立ちに目立ちまくっているドイツ人の姿はソーセージコーナーの前。お前はパブロフの犬かつ！

慌ててそちらに近寄って行くと、その気配を感じて振り返ったドイツ人の瞳がすっごく輝いている。もう眩しいくらいの青い瞳。

「コムギ！ これ素敵ですね！ ゲートウシエーン！」

「はあ？」

野球のグローブかと思えるほどにでかいその右手に握られていたのは、まさかの子供用ソーセージ。魚肉。しかも、戦隊もの。

まだ隣の子向け魔法少女にひかれなかっただけ、マシなのか？

「これ、カコイイ！ コムギ、買って！ 買って！」

「どこのお子様なのよ……」

ものすごい勢いでアピールしてくるドイツ人に呆れた視線を送るが、当人はどこ吹く風でこちらに迫る。だから、遠近感狂うからそんなに近付くなって。

「そんなの、高い割には中身があんまし入ってないし、却下」

「悲しゅうございますよ！ オリーはこれが必要なものだと考えます。素晴らしいデザイン、オリジネル！ 中には四つ。ファータア、ムッタア、コムギにオリー。最高です。仲良しの証ですね！ いかがですか？」

「いかがですもなにも」

あなたはなぜスーパーのソーセージコーナーで、とどろく美声を使って演説なんかを始めちゃったりしているんですか、と小一時間こっちが問いつめたいわ。

さっきまでは怖いもの見たさだったお客さん達が、あまりのくだらないこのやり取りに、くすくすと笑い声を漏らしている。

期待に満ちた顔でつきだされたそれを受け取るかどうか迷っていると、くいつと服の裾を誰かに引かれた。

驚いてそちらを見れば、小学生低学年の男の子がひとり。何だかしたり顔で私を見詰めている。

「姉ちゃん、買ってやれよ。可哀想だろうが！」

哀れむような瞳を向けられたドイツ人は、わかっているんだかわかってないんだか、思わぬ援護射撃に大きく頷いた。なにこれ、私悪もんくさくない？

頼んだぞ、となぜか偉そうに言い置いて、同じソーセージを掴んだ男の子は、先で待つ母親のもとに走っていく。た、頼まれてもな

あ。

「コムギ……」

「あーもう、わかった！ ひとつね、ひとつだけだからねっ」

やけになつてそう叫ぶと、オリーはぱつと顔を輝かせ、突然私の身体をぎゅうつと抱き込む。ええええ。

大きな背中を折り曲げて私を胸の中に閉じこめると、頭のてっぺんに頬をすりすりとしり寄せてきた。

ちよ、ちよ、ちよ！ あの、なんか心なしか私の身体、地面から浮いてますよね！？

「Ich liebe Dich、コムギ……」

「わわわわかった、よくわかんないけどわかったからっ」

「Sei doch immer bei mir nahe zum Greifen……」

ええい、何を言っているのかわからん！ ジャパニーズプリーズ！

ドイツ人はじたばたと暴れる私の身体をそつと離すと、少しだけ頬を染めて微笑む。その青い瞳がなんだか熱っぽく私を見つめるのは、なんでだろう？

呼吸的な意味で真っ赤になった私に、再びそのいかつい顔が近づいて、そして。

ちゅっ。

鈴木麦子二十五歳、初めてのキスは近所のスーパー。しかも、ソーセイジコーナーの前でした。

日独同盟破棄!?

「日独同盟を破棄したい。切実に、ものすごく!」

日本酒の入ったコップを割れない程度にがつん、とこたつの天版に叩きつけ、私は隣に座るでかい生き物を睨み付けた。

ダイニングから続く居間、テレビの前のこたつにて。なぜか満足げな顔をしたドイツ人は、心得たように私のコップにお酒をつぎ足している。いや、間違っ^てないけどそうじゃないっ。

「みかん、おいしいですね」

「田舎からの直送だぞ、当然! ……じゃなくて、ちょっと近いっ」

そもそもこたつって四面あるじゃないの。どうしてわざわざ隣に座るのかなあ!?

しかも、無理矢理隣に身体を押し込んだドイツ人は、ぎゅうぎゅうと私に寄ってくる。おいこら、懐くんじゃないっ。

「狭いつ! オリーはあつちに座ってっ」

「狭い? オリーは狭くないですよ?」

でっかい手でちまちまとみかんの皮をむくドイツ人は、私の言うことがまったくわからないとでもいうように、こつと首を傾げてみせた。か、可愛くなんかないんだからねっ。

「誰があんたの意見を訊いた! 私が狭いのっ。潰れるのっ」

その言葉にドイツ人は大きく頷くと、むき終わつたみかんを黙つてこちらに差し出した。反射的にそれを受け取ると、私はなぜかそのまま彼に抱き上げられてしまう。ええええええええ!

両脇に差し込まれた大きな手のひら。それがふわつと私の身体をいとも簡単に持ち上げる。そうして自分の足の間へと私を降ろし、そのごつつい腕が腹にぎゅっとまわつて、拘束完了。

「これでコムギ、狭くないですね?」

「ばばばばばば」

あまりのことに、罵声さえ出てこない。

それをいいことに、ドイツ人は私の耳にやたら可愛らしいリップ音を響かせてキスをした。なんだこれなんだこれなんだこれ。

そして、匂いを嗅ぐように首筋にその高い鼻を埋められたところで、私はギブアップ。あくあく和白いタオルを求めて、ちょうど追加のみかんを持ってキッチンから戻ってきた母に、必死に手を伸ばす。れ、レフリーー!

「あらあ、素敵! 昔のお父さんと私を見てるみたいっ」

「娘の貞操の危機だつつの! ここは怒るところだから! ボケるところじゃないからっ」

「えー? だって、ハーフの赤ちゃんて天使みたいでいいわよねえ?」

「オリー、頑張りますよ!」

「あなたは余計なところに参戦すんなっ」

首にキスしてくるドイツ人を、手のひらで押しのけて、私は叫ぶ。するとそれ以上のことはせず、彼はとろけるように甘い笑みを私に向けた。自然と自分の顔が赤くなるのがわかる。く、悔しい。

「に、日本酒、おかわりっ」
「Ja！」

あのあと、なんでか客室にお泊まりしていたドイツ人に私が叩き起こされたのは、次の日の朝。日曜日の七時三十分。正気の沙汰とは思えない。私の日曜日を返してよう！

ていうか、未婚女性の寝室に勝手に入ってくるって、あんたの国は騎士の国だろうがっ。

「コムギ、早く早く。始まりますよ！」

「ううう、何がよ……？ って、ちよ、抱き上げるなっ」

何かそわそわしているなと思っていたら、なかなか起きあがらない私に焦れたドイツ人は力業に訴えた。

つまり、パジャマ姿の私をベットから抱き上げ、そのまま階段を下りて居間へと向かう暴挙に出たのだ。小学生体型とはいえそれなりに重いはずの私を抱えても、ちっとも危なげのない足取り。素早くテレビの前までやってくると、こたつの中に私を押し込んだ。

そして、キッチンからオレンジジュースを持ってきて私に渡す。そのまま当然のように私を背後から抱き締め、彼もこたつへと足を伸ばした。待て、この位置はもう決定なんですか。

寝起きの頭に次々と浮かぶ疑問は、あわあわという不明瞭な言葉でしか出てこない。そんなことにおかまいなし。ぷちん、という音とともにテレビを点けると、ドイツ人は私の頭を顎でぐりぐりと撫でてきた。

痛い痛い痛いってばっ。

「ソーセージ、始まりますね」
「意味がわからない！」

画面を太い指でさすドイツ人に不機嫌を伝えつつ、私はオレンジジュースを一口飲む。気遣いのできるいい人ではあるんだよ。ちょっと斜め上に行きがちだけど。

まだ眠気の取れない目をごしごしと擦っていると、どこから出てきたんだか、まだほかほかしている濡れタオルで顔を拭われた。なんか、介護？

少しずつ覚醒していく頭の隅でそんなことを考えていると、目尻にちゅつとキスされる。

ゆ、油断も隙もあったもんじゃないね！

「ほら、コムギ！」

赤くなった頬を誤魔化すように首を振った私に、妙にはずんだ声でドイツ人が再び話しかけた。だから、なにがどうしてなんだというの！

促されるまま、仕方なくテレビに目をやった私がそこで見たものは。

『あーいーとーゆーうきー！ かかゲーとーゆくーんーだー！ ライオンジャー！』

……ああ、ソーセージ。うん、ソーセージね……。

何が悲しくて二十五歳独身女性が、三十五歳ドイツ人と一緒に日曜の朝から戦隊ヒーローを見なければならぬのか。

そんな疑問に思いつきり脱力してしまった私は、背後にある広い胸に背を預け、大きいため息をついた。その行動に何を勘違いした

んだか、より密着してきたドイツ人は、ライオンジャーについて一
所懸命説明をしてくれる。

「ライオンジャー、悪いと戦います。レックヒトウントフライハイト
！」

「うんうん、はいはい。ライオンジャー、かつこいいねっ」

いい加減あきれて適当にそう返すと、ドイツ人はなぜか一転、悲
しそうな顔になる。

まるでジャーマンシェパードがご主人に叱られて、耳と尻尾を垂
らしているが如く。あれ、でも今私、ちゃんと同意したでしょうが。
何が不満じゃっ。

「オリーとライオンジャー、どっち？」

「は？」

「オリーとライオンジャー、どっちが素敵ですか？ どっちを愛し
ていますか？」

ええええええええ。そういう話なの！？

口元は微笑んでいるけど、真っ青なその目がまったく笑ってない。
顔怖い、顔が怖いよ。

どう答えればこの地獄から抜け出せるっていうのっ。

「コムギ！」

ええいつ。

迫り来る悪鬼の如き顔に耐えきれず、私は思わずぎゅっとその首
に腕を回した。しかし、太い首に身体だ。膝立ちになって両腕を回
しているというのに、私では彼の身体を抱き締めきれない。

その鍛え上げられた固い身体の感触に、走り込みと筋トレを趣味

とする私はつい感動してしまった。胸板厚いなあ！

すると突然、強い力で抱き締め返される。ぐあああつ。さばおりっ、さばおりになつてゐるってえ！

「ラブ注入！」

「どこで覚えたそんな言葉ーっ！ ていつか出ちゃうっ、内蔵が出ちゃうっ」

「コムギ、Moechtest du meine Frau werden!？」

「くくく、苦しいっば！ もうっ、わかった、わかったっばああああ！」

その後さんざん締め付けられてぐったりした私の顔に、ちゅっちゅとキスを降らせたドイツ人は、朝ご飯までしっかり食べて自分の家へと帰って行った。

この時、自分が何に同意してしまったのか、私はまだ知らない。なんていうか、ドイツ語なんて嫌いだっ。

モアフェイマスセレブゴリラ！

そんなこんなでひどい週末を送った、月曜の朝。

いつも通りに出勤した私は、隣の席の後輩がいそいそと机の下に何かを挟み込んでいるのを目撃した。あれは……グラビア？

「羊子ちゃん、羊子ちゃん、なになに、それ。沖縄消防団の半裸カレンダー？」

「いやだ、麦子先輩っ。いつ私がそんな破廉恥なもの持ってきました？」

「先週」

お弁当組がお昼を食べる会議室で披露したことを、よもや忘れたとはいわせんぞ！

しかも、それはいまだこの残念な美人である後輩のロッカーに、思いつきり貼られている。どの口が言うかつ、と後輩をびよびよ口の刑に処した私は、改めて机の下の写真に目をやった。

それは、どこかで見たような、いかつい顔の外人が写ったポスタ
ー。

薄い金色の短髪に、青い瞳。高い鼻にがっしりとした輪郭。太い首に分厚い身体は、何かのユニフォームに包まれ、白い網の前で仁王立ちになっていた。なんていうか、浅草によくいる風と雷の神様っぽい感じ。写真なのに、威圧感が半端ない。んん？

いやあ、世界にはよく似た人間が三人いるっていうけれど、ねえ？

「あらっ、麦子先輩も好きですか、この人！ いい具合にムキムキで素晴らしいですよえ。この不動明王かってところが素敵……」

うつとりと舐めるような視線で、羊子ちゃんは机に挟んだその写真を見つめて言う。

普段から「細マッチョとかもうあり得ないです！ マッチョって単語に謝れ！」と憤慨する後輩は、無類の筋肉好きだ。

羊子ちゃん、お願いだから帰ってきて！ 現実には！

「いや、好きっていうか、なんかよく似た生き物を最近見かけるっていうか」

「えっ！ それ本人じゃないんですか？。彼、日本に長期滞在中なんですよ！」

「ち、違うと思うなあ。だって、その人警備の仕事してるって言うてたし」

俄然本気モードに入った羊子ちゃんをいなしながら、私は誤魔化すように笑う。

いやいや、まさか、ねえ。だってこれ、どう見ても有名人じゃないの。ばりばりに。

あのすつとぼけた日本語を話すドイツ人と、絶対違うって。違う違う。違うはずだ！

「なんか、飛んでくるタマから何かを守ってる人らしいよ。部下に指示出したり、蹴り返して助けるんだって。だから、こんな風に雑誌に載ってるわけないってえ」

「せせせせ先輩？」

前にドイツ人から聞いたことをそのまま伝えた私に、羊子ちゃんがイケてるDJ状態に陥ってしまう。なにになに、どうした。

そして、がしりとおもむろに私の肩を掴み顔を近付けると、内緒話でもするようにひっそりと口を開いた。

「先輩、その人もしかしてオリヴァー・ビルケンシュトックさん、じゃないですよね？」

「え、オリーだけど？」

何で知ってるの、と私が訊き返そうとした瞬間。
羊子ちゃんが爆発した。

「のおおおおおおおおおおおおおおっ！」

幸いにしてまだ出勤ラッシュには早い時間だったため、遠くにいる営業部長がびくうっところを振り返っただけで済む。

私は片手を上げ、何でもないことをアピール。部長は私にむかつて軽くうなずくと、またもとの体勢に戻ってくれた。いい人だなあ。当の羊子ちゃんといえは、思いつきり叫んだきり、そのまま真っ白い灰になっちまっている。叩いたら直るかな、これ。

しょうがなく、私たちが社内で密かに作っている、自主的運動部の合い言葉をささやいてみた。

「好きな痛みはっ？」

「筋肉痛！ って違あああうっ！」

反射的に反応して復活してくれた羊子ちゃんは、ひとりで見事なノリツッコミをしてみせると、ぶんぶんと首を大きく振って仕切直した。

「麦子先輩、よおおおく聞いてくださいね。そのオリーはですね、サッカー選手なんですよ！ しかも、超有名所ですっ。世界レベルですっ。モアフェイマスセレブ！」

なんだその怪しい英語は、と突っ込もうとして止まる。今、なんて言った？

サッカー選手で、有名人。しかも世界レベルで？ あのドイツ人が？

いや、だってあの人、日曜だって土曜だって家にいるし。そりゃあ、毎朝一緒に走り込みしたりしてるけど、基本仕事してるのかしてないのか怪しいところだし。

まあ、平日私が会社にいる間は何をしているのか知らないけどさ。お金にはまったく困ってもないみたいだけども。

「ないない！ 他人のそら似に違いないよ！」

「同姓同名のそっくりさんは、もうそれ本人ですから！」

「ただだだって、このゴリラがサッカーしてるの見たことないよっ。身体は鍛えてるみたいだけど、基本自宅警備員だよっ」

「引退したんですよ、ついこの間。ドイツの名門クラブでずうっと第一GKで、しかもドイツ代表選手。なんでかすぐに来日して、どつかのチームの臨時コーチしてるはずですよ？」

「サッカー詳しくないし！」

ショックから回復した羊子ちゃんに代わって、今度は私がガクガクブルブルと震え出す。聞いてない。まったく聞いてない。

いや、ドイツ人は言ったつもりかもしれないけれど、私を含めて母も彼が警備の仕事をしてるって今の今まで信じてたんだよ。母はきつとまだ信じているよ！

油が切れたロボットののような動作で、私はショック状態のまま無言で席に戻り、ノートパソコンを開く。忘れよう。ここから一時間前の記憶を削除しよう。ええと、デリートボタンはどこだ。

「麦子先輩、それ電源入ってないです。それに、デリートキーをどんだけ押しても、現実には消えないですからねー」

冷静な後輩のツッコミが痛い。うつつ。

そんな風に始まった私の月曜日が、前日のごとく散々だったことは言うまでもない。あきらかに拳動不審な私を、同僚や上司は心配そうに遠巻きに見る。なぜか色々な菓子を献上されるのは、私の見た目があれだから。

いつもなら「Note！子供扱い」と断るが、今日はそんな余裕すらなかった。頭の中をゴリラ的な何かがぐるんぐるんと駆けめぐる。午後になっても立ち直れない私は、上司から早退命令を発令され、会社から帰されてしまった。しかも、なぜか羊子ちゃんがロッカーに常備していた、あのドイツ人の写真集なるものも持って。

『オリヴァー・ビルケンシュトゥック 霊長類最強ゴールキーパー！』

会社から帰り、早々と部屋着に着替えてベットに転がった私は、羊子ちゃんから借りてきたその本をぱらぱらとめくってみた。中身は意外と硬派な記事と写真が満載。いい太股だあ、とか思っていないよ、多分。

そこに写っていたのは、雄叫びを上げているような顔。横っ飛びになってボールをキャッチしている姿。仲間と肩を組んで笑って、時にゴールに寄りかかり涙を落とす写真たち。

それは私の見たことのない、隣のドイツ人の姿だった。なんとなく、赤面。

恥ずかしさを誤魔化すように、私はひとりごちてみる。

「これ、本当にオリーなのかなあ」

「本当にオリーですよ」
「うわああああああっ」

こっそりとエロ本を見ていたら、母親に乱入されてしまった男子中学生がっつくくらい、私はベットの上で跳ねる。かけられたその声に振り返れば、奴がいた！

だから、なんで、うちにいるの！ ドイツ人！

私は慌てて枕の下に写真集を隠そうとするが、間に合わない。それはさっさとドイツ人に取り上げられてしまった。

そしてなにやら真面目な顔で写真集と私を見比べると、満面の笑みになる。うわあ、嫌な予感しかしない、この展開。

「本物がここにいますよ、コムギ……」

ぎしっとドイツ人の重みにベットが軋む。ななななんだ、この生々しい音っ。

寝っ転がった私の身体を、囲い込むようにのしかかってくるドイツ人に息を飲む。そっと、その手のひらが私の頬に触れ、親指がゆつくりと肌を撫でた。

ぞわり、と不快ではない感覚が背筋を駆け上る。

「フォートよりもオリーのほうが、ガンツグウート！」

そう言うなり唇に柔らかい感触。何度されても慣れない口付けに身体の力が抜け、私はベットへと沈み込んでしまった。よくわからないけど、ずるい、と思う。

角度を変えて何度でも重なってくるそれが、いつの間にか私の唇を割って深く深く。何もかも飲み込むように、奪うように、どこまでも追いかけてくる舌。

酸素を求めてドイツ人のがっしりとした肩を叩けば、ものすごく

未練たらしく、最後に軽いキスを残してそれは離れていった。

甘く痺れる頭も身体も、筋肉質な彼の高い体温に支配されている。ざらりと耳に触れたドイツ人の顎。その髭のそり残しの感触にまで、反応してしまう。

「アレスクラア？」

上質のベルベットでも撫でているような低音を耳に吹き込まれ、私は意味もわからずがくがくと頷く。

そんな私にドイツ人は満足そうな笑顔をむけた。

大きくて固い手のひらが、乱れた私の前髪をさらりと撫でつけ、そのこそばゆさに私は少し肩をすくめる。

「Ich bin in dich verliebt」.

小さくささやかれた異国の言葉が切なく響いて、私はそっとドイツ人に手を伸ばし　むにとその頬を思いつきり摘んだ。調子に乗るでないっ。

多分真っ赤になっいるであろう顔のまま、四つん這いで私を覗き込むドイツ人を睨み付ける。それでもへらりと嬉しそうに笑うドイツ人は、もう本当にどうしようもない。

再びゆっくりと寄せられる唇に、私は今度こそ諦めてそっと目を閉じた。

モアフェイマスセレブゴリラ！（後書き）

ドイツさんと私、ここでいったん完結となります。

このあと、オリ―視点のお話を続けようと思っ
ていますので、よろしければそちらも覗いてくださると嬉しい
です。

妖精との出逢い

初めて彼女を見たとき、俺の身体はパンツァーファウストの直撃を受けたかのように、ものすごい衝撃にみまわれた。

ドイツからほとんど身ひとつで来日して三日目の夜。

引越しの挨拶は大事だろうと、本国から持参したワイン二本を手隣の家までやってきたはいいが、チャイムを押しても返事はなし。そのまましばらく反応をうかがうが、どうやら留守だったらしい。

多少がっかりして、また後で来ようと振り返ったそこに、彼女がいた。

見るからに華奢な身体はびっしりとしたスーツで包まれ、一見して働く女性なのだわかる。しかし、肩から提げた鞆のほづが大きく見えるくらい、彼女は小さかった。

自分が手をかざせば余裕で包み込めるほどに小作りな顔には、印象的な大きな黒い瞳。繊細な睫毛に縁取られたそれが、綺麗に切り揃えられた前髪の下から、警戒心も露わにこちらを見つめていた。

「がん、と脳みそを揺さぶる衝撃。これは、まさか妖精か!？」

「コンバンハ!」

反射的にかけた俺の声に、小さな彼女はびくうつと肩を揺らす。大きな瞳がさらに大きくまん丸くなり、魅力的な桜色の唇がぼかんと開けられた。

彼女はどうやらこの家の住人らしい。警戒しながらも意を決したように、そろりそろりとこちらに歩み寄ってくる。

その姿たるや、まさに皇帝ペンギンのヒナ！

いや、むしろ俺の大好きなティディベアそのもの！

今すぐにでも抱き締めて、自分の家まで持って帰りたい衝動を抑えつつ、俺はすぐそばまでやってきた彼女に持っていたワインを差し出した。

「隣に、来ました。オミヤゲ？」

その言葉に彼女の視線は俺の手元に落とされ、一瞬の後、ぱっと上げられた顔には大きな喜びが溢れていた。

輝かんばかりのその可愛らしい笑みに、俺の胸が不規則に脈打つ。

おかしい。健康面に不安はなかったはずだが。

ぼんやりと彼女を見つめる俺にむかって、小さな手がそっと差し出された。俺ははっと我に返り、袋を渡したところで細い指に指が触れ、再び身体にびりびりとした何かかほとばしる。不快ではない。むしろ、快樂に近いその感覚。

「わざわざご丁寧に、ありがとうございます」

そうして、ずいぶんと高い位置にある俺の顔を覗き込むように、彼女はもう一度につこりと笑顔を見せてくれた。

三度目の衝撃。

チャンピオンズリーグの決勝でPK合戦になった時にも感じなかった、興奮。息切れ。目眩の症状に、俺は自分の頬が熱くなるのを感じる。これは、もしかや……恋、なんだろうか。

できるならばこのまま、ずっとずっと彼女の姿を目に焼き付けていたい！

そんな風にじっと凝視している俺に、彼女は少しいぶかしげに眉

をひそめ、困ったように声をあげた。

「あのう、ええっと……」

「オリヴァーです。オリヴァー・ロルフ・ビルケンシュトゥックです。ドイツから来ました」

すかさず自分をアピール。ナイスパンチングだ、俺。

絶対絶対絶対絶対、彼女に自分を覚えてほしい！

その小鳥のような声で自分の名前を呼んでほしい！

「Sie」なんてすつとばし、「du」と話しかけられたって、喜んでそれに応えよう！

「オリヴァー、さん？」

「オリーのフロインドウ、オリーと呼びます」

そう俺が重ねて言えば、彼女は少し考えた後、大人びた微笑みをこちらに向けた。俺も今度こそとびつきりの笑顔でそれに応える。

本国にいるときのよう、この可憐な妖精にどうか怖がられていませんように、との願いを込めて。満面の笑みで。

それが俺　オリヴァー・ロルフ・ビルケンシュトゥックと、隣の小妖精、鈴木麦子との運命の出逢いだった。

そもそも俺が本国ドイツから、遠く離れたここ日本にやってきたのは、日常につきまとうわずらわしさから逃れるためだった。

長年人生の一部だったゴールキーパーという仕事を辞してから、

俺を追いかける記者たちときたら、やれいつ監督になるんだ、いつ結婚するのかとこうるさい。

心底疲れていたそんな時に出会ったのが、かの有名な日本のアニメーション。

それは古き日本を舞台にした、心温まるファンタジー。二人の幼い姉妹がふくろつのような森の妖精と心を通わせる物語。素晴らしすぎる！

俺は泣いた。三日ほど泣いた。号泣だった。

話自体もそうだが、俺が特に心惹かれたのは森の妖精。その中でも、あの小さい白いやつ。それがちょこまかと歩く姿は、俺のゴールマウスを見事に突き刺さった。

こんななりをしていても、昔から小さく可愛らしいものが大好きで、本当のプライベートな寝室にはこれでもか、というほどシユタイフ社製のティディベアが並べられている。もちろん、ひとりひとりに名前まで付けて。

幸い俺は独り者だし、金にも困ってはいない。そこで急に思い立つ。そうだ、日本、行こう！

そうして、取るものも取りあえず、俺は憧れの地日本へとやって来たのだった。

『聞いてくれ、モトハシ。俺は昨日妖精に会った。いや、天使かもしれない』

「スタッパー、医療スタッパー！」

開口一番俺がドイツ語でそう告げると、クラブチームで一緒だったことのある元MFで現コーチのモトハシは、青ざめた顔でスタッパーを呼んだ。

『なんだ、誰か怪我でもしたのか？ この大事な時期に』
『うん、なんか確実にひとり、痛いこと言ってる人がいるよね。俺の目の前に』

季節は冬だというのに、なぜか額から汗を流しながら、モトハシはわけのわからないことを口にする。思わずしかめっ面になった俺を見て、呼ばれて出てきたスタッフは一瞬にして回れ右。そのままスタッフルームへと戻っていった。

怖がられるのには慣れてはいるが、さすがにちよつと寂しい。

あからさまにへこんだ俺を見て、モトハシは笑って肩を叩いた。

『すぐ慣れるって。時が経てばわかることがあるって言うだろう？』

「Ja, Kommt Zeit, kommt Rat.」

『そうそう、それ。せつかく日本語だつて勉強したんだし、どんどん話しかけてみるって。特にキーパーたちなんか、おまえに憧れて目えきらつきらせてんだから。俺がお前を引っ張ってきた時なんか、しばらく俺、神様扱いされたもんね』

にやつと彼独特のいたずら坊主のような笑顔に、俺もつられて笑みをこぼす。

俺が今臨時コーチをしているこのクラブチームは、現在ドイツで言うところのツヴァイテリーガに位置している。

現役時代、日本から移籍してきたモトハシと俺とは、彼が帰国して引退してからも交流が続ぎ、今回来日するにあたって色々世話をしてもらったのだ。

その中のひとつに今の住居もあったが、そう考えるとモトハシは俺と彼女の恋のキューピッドなのかもしれない。

ここはひとつ、モトハシの言うように日本語を使ってこの気持ち伝えてみようか。うむ、それがいい。

「モトハシサン、オリー、あなたを大切にしたい！」

俺が最大限の感謝の意を声高に叫ぶと、練習場で柔軟をしていた選手やスタッフ一同が、一斉にこちらに顔を向けた。何か、見てはいけないものでも見てしまったかのような彼らの表情に、モトハシは泣きそうな顔で叫ぶ。

「ちがあああうっ！ 誤解だっ！ 誤解すんなあああうっ！」

感謝を受けて当然だというのに、謙遜をするモトハシは本当にいい奴だ。

日本人とは本当にシャイな民族だなあ、と俺は微笑ましくそれを見守るのだった。

妖精との出逢い（後書き）

オリ編、はじまりました。

彼の性格からして麦子の時とは違い、ちょっと固めな感じになるかとは思いますが、しょっぱなから一目惚れしてましたw
まさかのドイツ版オトメンです。また、しばらくお付き合い頂けると嬉しいです。

キスとみかんとミソズツペ

初めて彼女　コムギにキスをしたのは、近所のスーパーのウルストコーナー前だった。

『ずっと、俺のそばにいてくれ……』

そうささやいて、この胸の中に抱き締めた彼女の身体は予想以上に小さく細く、そして今まで感じたことのないくらい柔らかかった。強く強くそれを感じたいような、壊してしまいたいようで怖いような、相反する幸福感に俺の頭はどうにかなくなってしまった。

サッカーで鍛えた理性を総動員しようやく身体を離れた俺が、そつとコムギの顔を覗き込むと、彼女は可愛らしく赤く染まった顔でこちらを見上げた。

少し、避難するようなその瞳は、しかし俺のなけなしの理性をぶちやぶる破壊力を持っていた。苦しかったせいか、大きな黒い瞳がうるんで。

そして俺は、思わずその薄紅色の唇に自分のそれを重ねていた。信じられないほどの甘い、甘い感触。一瞬だけのその触れあいに、暴走しそうになる自分自身を抑え付けるにひどく苦勞する。

ここは人前だ。人前なんだ。押し倒すわけにはいかない。……多分。

何か他のことを考えろ、考えるんだ、オリヴァー。そう、ローマ教皇だ。教皇の顔を思い出せ！

「おっ、オリー？　大丈夫？」

一瞬にして赤から青へと変わった俺の顔色に、恥ずかしそうに辺りを気にしていたコムギが慌てて手を伸ばしてくる。

さすがは教皇。想像以上の破壊力をもって、俺の中の悪魔を追い払ってくださった。気分は……あまりよくないが。

しかし、小さなコムギの手のひらが心配そうにお腹をさすってくれるのは、嬉しい。もしかして、これが試練を乗り越えた俺への恩恵か！

「コムギ、I c h l i e b e d i c h i m m e r u n d e w i g .」

永遠に君を愛する、なんてまさか自分が誰かに告げることになるうとは、今の今まで想像もしていなかった。

むしろ、そんな風に愛に夢中になっっている奴らを、「イタリア人でもあるまいし」などと冷ややかに見たこともあった。そんな自分が、今や目の前の妖精に夢中。

その言葉に、コムギは仕方ないともいうような優しい目をして、ぼんぼんと俺の腕を叩いて頷いた。

「わかったってば。もう、早く買い物しないと遅くなっちゃうよ？」
「Ja！」

当然のように指しだした俺の手に、少し戸惑ったようなコムギは、それでもそうつとその手を重ねてくれた。潰さないように、傷つけないように、小鳥を包み込むような繊細さをもってその手を握る。

その時俺は確信したのだ。絶対に、彼女と結婚するんだ、と。

『ということ、日本式プロポーズの言葉を教えてくれ』
「またパンチングでゴール狙うようなことを……」

本屋でそれらしい本を買い込んだ方がいいが、自分が日本語は話せても読み書きがまだ完璧ではない、ということをつっかり忘れていた。

そう言って、すべての本をどさっとモトハシの目の前に置く。すると彼は頭を抱えて机に突っ伏してしまった。既婚者である彼が頼りなのに。

ドイツであれば同棲したままの事実婚でもいいだろうが、ここは日本、そうもいかない。特に、コムギに対して俺はいい加減なことはしたくないのだ。

将来をしつかりと約束する前に手を出せば、あの優しい両親が心配するだろう。正直、このままでは俺の理性が保たない。

『……婚約して、彼女に早く手を出したい』
『いやいや、その本音は隠しとけよ!』

ぼそりと俺が呟けば、机から勢いよく顔を上げたモトハシが叫ぶ。そうして再び頭を抱えると、何かを思いついたのか、ばしりと机を叩いて立ち上がった。

「こういつ時こそ、うちの選手たちだろう!」

「センシュ……シュピールア?」

「そう、シュピールア。その彼女と歳が近い奴らに助言してもらったほうがいいって。ラートだよ、ラート。そうすりゃ懇親にもなるしなっ」

「R a t ……」

なるほど、そう言えば主力選手はみなコムギと歳が近い。意外と参考になるかもしれないな。さすがだ、モトハシ！

「ダンケシエーン、モトハシ！」

「ぐわあっ」

感謝を伝えるべく、俺は目の前のモトハシを強く強く抱き締める。何から何まで、本当にしてもしたりないくらいだ。

腕の中で照れて暴れるモトハシの身体をいったん離し、その頬を両手で挟み込む。そして、俺はドイツ人はあまりしないキスというやり方で、最大限の感謝を示した。

右に、左に、もう一度右に、とその時。

がちやっつとミーティングルームのドアが開き、事務の女性が顔を覗かせた。彼女は俺たち二人を見て瞬間的に固まると、そのままそつとドアを閉めて出て行ってしまふ。

『なぜだ、ササキサンが戻ってしまった。俺かお前に用事ではなかったのか？』

「うわあああああああー！」

俺がモトハシにそう告げると、彼はなぜか叫び声を上げ、出ていったササキサンを追いかけて行ってしまふ。現役時代と変わらず熱いな、モトハシ！

日本人は本当に仕事熱心だ、と俺は感心してそれを見送ったのだつた。

そんなことがあってから、数日後。待ちに待ったチャンスが俺の

前にやってきた。

コムギのムツティに「田舎からみかんが届いたの、食べに来て来て！」との誘いを受けたのだ。神は俺を見守ってくださいている！俺は多少よそ行きの服に身を包むと、いそいそと隣の家のチャイムを鳴らした。

少し間があつて開けられたドアから顔を覗かせたのは、毎日でも見ていたほど愛しいコムギだった。ああ、今日もあの日本アニメの妖精のように、可愛らしい……。

「あ、オリー、早かつたねえ」

「グーテンアーベントウ、コムギ！」

「こんばんは、かなあ？」

「Ja！」

聞き取れたドイツ語に喜ぶ顔にすかさずキスを贈ると、コムギは手にしていた調理器具で俺の頭を軽く叩いた。照れる姿も初々しく、たまらない。

こちらを睨み付ける彼女は、まるでコアリクイの威嚇姿にも匹敵する可愛らしさだ。

「もう、油断も隙もないなあ。早く入って！ おみそ汁火にかけたままなんだから！」

「ミソズツペ？」

ぱたぱたとキッチンにむかって駆けていく小さな背を追って、俺も今や自分の家並みに慣れてしまった廊下を抜ける。キッチンから続くダイニングに入ると、ミソ独特の匂いが鼻に届いた。

なんだろうか、この幸福感。この場所こそが人類の追い求めてきた楽園なんではないだろうか。そんな感激にひたりつつ、俺はこちらに背をむけて立つ彼女の背に近づいた。

「今日はコムギ、食事つくるですか？」
「みそ汁だけね。お母さん、ご近所にみかんのおすそわけ行ってるけど、もうすぐ帰ってくるよ。あ、そこのお椀取ってくれる？ 三つね。お父さん、今日も残業だから」

真剣な表情で鍋を見つめるコムギが、こちらを見ずに指示を出す。これは……なんだかとても、新婚ほい！

俺は言われたとおり、食器棚から三つ分の木でできたお椀を出す。そうか、コムギのファーターアは帰っていないのか。できれば家族が全員揃ったところでプロポーズしたかったのだが、仕方がない。

「オリー、みそ汁よそうから、悪いけどあっちのテーブルに持って行ってくれない？」

「かしこまりました！」

大まじめに頷いてみせた俺に、コムギはなぜか爆笑しながらお椀を渡す。「熱いから気を付けてね」という言葉だけで、天にも昇る心地だ。

結婚すれば、これが毎日……そう思うと、自然と気合いが入る。それに、昼間若い選手たちから教えてもらったプロポーズの中に、確かミソズツペに関するものもあったはず。

よし、それでいこう！

決意を新たに、テーブルにミソズツペを並べ終わると、俺はいそいそと再びコムギのもとへとむかった。

コムギのムツタアが帰ってきたところで、俺たちはダイニングで

の食事を開始した。

コムギの手料理、コムギの手料理、コムギの手料理。しかも、初めて味わうのだから、感激も深まる。

「オリー、みそ汁の味、大丈夫？」

一口一口大事に味わっている俺を見て、みそ汁が苦手だと誤解したのか、心配そうにコムギが訊いてくる。

ああ、もうだめだ。コムギのことが愛おしすぎて、我慢できない！俺はお椀と箸を置き、目の前に座る彼女の目をしっかりと見つめる。緊張のため、顔が引きつっているのがわかるが、仕方がない。

そんな俺の態度に何かを感じたのか、コムギとコムギのムツタも箸を置いて俺を見つめ返してくる。こんな緊張感、W杯決勝でも味わえないだろう。

「コムギ、オリーは大切な話をします」

そう前置きをすると、コムギはかすかに首を傾げながらこくりと頷く。

こうなればもう、後には引けない。俺は昼間、チームの第一GKであるイリエに聞いたセリフを、必死に頭に思い浮かべた。

彼曰く、日本で最もポピュラーなプロポーズの言葉らしい。

それさえ言えば絶対に伝わる！と、モトハシも自信を持って後押しをしてくれた。もしもそれで駄目だったらと、第二案まで考えてくれたキーパーチームにも感謝。しかし、緊張でそのふたつのセリフを正確に思い出すことができない。

まあ、あとは勢いでなんとか伝わるだろう！大切なのは気持ちだ！

こくり、と生唾を飲み、俺は覚悟を決めてその言葉をコムギに放った。

「毎日みそ汁で、オリーのパンツを洗ってほしい！」
「無理です！」

一世一代のプロポーズは、その日、なぜか失敗に終わった。
やはり日本語は難しい。機会を見てまた明日、今度はドイツ語で
頑張ろうと、俺は決意を新たにしていたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0649z/>

ドイツさんと私

2011年12月7日01時52分発行